

西鶴作品の茶の湯知識の基層——俳諧辞書『類船集』を中心に——

石 塚 修

はじめに

又茶の湯は、我朝の風俗、人のまじはり、心の花車になるのひとつなり。是に入ての徳は常住万事に氣の付所各別なり。武士も我役の一腰は其まゝ、此付合も手ぬきとはいひがたし。今の町人の茶事は榮耀と心得、諸道具に金銀をつるやし、数寄屋、長露路に商ひはんじやうの地をせばめ、美食を好み、衣服をあらため、よろづにきよらをつくし、此奢に家をうしなふ人、かしこき京都にもあまたなり。さはいへど、此事わきまへなきは、人間ふつゝかにして口をしき事のみ。あるひは欠茶碗にしても其心ざしひとつなり。元是作意なれば、一通り手をひかれ、其上の道具さへつまらば、何事にもくるしからず。世のたのしみなるに、皆人心つくせし振舞にあひながら、その座を立ば、花の生やう、炭の形をそしりぬ。是ならひえて茶入の名を付て見る程には、おつ取て十年のけいこなくしては成りがたし

これは、『新可笑記』卷二の四「兵法の奥は宮城野」にみられる茶の湯に関する批評である。西鶴作品において具体的な茶の湯観が示されている部分であり、西鶴と茶の湯の関係を論ずるにあたつては注目すべき部分とい

えよう。前半で当世の町人たちの茶の湯にたいする批判が展開され、後半では茶の湯の心得なくしては人間として物足りない」と茶の湯の意義が述べられている。

こうした西鶴作品での論評をまつまでもなく、茶の湯は当時の町人社会では注目を集めていた。西鶴より少しくだるが、三井家三代高房が二代目高平らの言行を集めた『町人考見録』（享保十一〜十八頃）を通覧すると、茶の湯への傾倒が、三井三郎左衛門・日野屋長左衛門・銀座（銀座の商人）といった有力町人の没落の原因として挙げられている。日野屋長左衛門は、

又は押小路の道具屋どもと出会、目利講、道具会に立まじり、吹そやされて当世道具を買求、自分はさまでこのまねど茶湯など致し、終に問やの身もちを忘れ……¹⁾

であったとされ、三井三郎右衛門（二代目俊近）は、

曾て商人心は之無く、さまざまあようにくらし、茶湯道具数奇を致し、後は聚楽松屋町通りに引籠り……であったとする。銀座の面々についても、

……世盛には夜普請を致て家蔵を建、見るとみまねに道具茶器も、われもわれもと相求め……

というありさまであったため、いづれも没落したのだと戒めを込めて紹介されている。茶の湯は、当時の町人にとって交際のための教養としては認知されていたけれども、骨董趣味としての茶道具への傾倒は、町人には過分の行為として厳に慎むべきだという風潮は、先の『新可笑記』ならずとも町人一般が持っていたごく常識的な茶の湯観だったようである。またこれは、茶の湯が町人社会でいかに大切な社交術の一つであったかということも如実に示している。

『新可笑記』でこのような茶の湯観を示していることは、西鶴が茶の湯にまったく無関心ではなかった証左である。西鶴の経歴には残念ながら直接的な茶の湯の経験を伝えるものは見あたらないけれども、町人社会で生きていくうえで、茶の湯への関心や知識が多少なりとも芽生えて獲得されていたことは、作品を通して十分に想像できる。もちろん、その中には遊里での茶の湯の見聞によって得られた知見もあったであろう。さらに、俳

諧との関わりの中でも茶の湯への関心や知識を深めていった可能性も大いにある。本稿では、西鶴当時の一般的な俳諧師たちがごく自然に目にしたと考えられる俳諧書から、茶の湯関連の知識の基礎になる可能性のある事柄を探り出すことで、俳諧師西鶴の茶の湯に関する知識の基層についての検証を試みようとするものである。

『毛吹草』と茶の湯

正保二（一六四五）年刊、重頼編『毛吹草』は俳諧辞書として入門期に広く用いられた書物であるとされる。⁽²⁾ その付合語の中から茶の湯に関する項目を挙げると以下のようになる。

| | | | |
|----------------|----------------|--------------|--------------|
| 芋……………水指 | 竹皮……………羽箒・草履・笠 | 昔……………茶 | 網……………茶壺 |
| 抱く……………茶壺 | 蓮華……………葉茶壺 | 井戸……………茶碗 | 扇置……………墨跡見る |
| 路地……………腰懸・笠・げた | 染物……………茶碗 | 鋸……………茶湯炭 | 行灯……………路地 |
| 盆……………茶湯・たばこ | 蹴躑……………白炭 | 覆……………茶園 | 暑……………濃茶 |
| 床……………掛物・茶壺 | 筒……………花 | 官……………釜 | 雪……………茶事 |
| 蜻蛉……………緒の結 | 壺……………茶 | 楊枝……………茶菓子 | 洪……………茶 |
| 渡……………茶壺 | 釣……………釜 | 風呂……………茶湯 | 屏風……………炉の先 |
| 壁……………掛物 | 恙……………香炉 | 袋……………茶入 | 引……………茶 |
| 額……………数寄屋 | 爪……………五徳 | 小鷹……………茶 | 煤……………古筆の物 |
| 釜……………炭 | 寝起……………茶 | 縁……………茶磨 | 簀子……………路地の雪隠 |
| 紙……………表具 | 棗……………茶入 | 円座……………腰懸・肩衝 | 炭……………正月の飾 |
| | | 手水……………路地 | |

棚……袋
茄子…茶入
蠟燭…数寄屋
臺……天目
霰……釜⁽³⁾
淡……茶

ここには、たとえば「芋」から「芋頭水指」、「臺」から「臺天目」、「蓮華」から「蓮華王茶壺」といった、あまり茶の湯に関する知識がなくても連想が容易である付合も見られるけれども、「蜻蛉」から茶入の仕覆の緒の結び目の呼称であり、天目茶碗の仕覆の緒を始末する場合の結び方でもある「蜻蛉結び」への連想のように、茶の湯の知識がないとわかりにくいものも見うけられる。「扇置」から「墨跡見る」といった連想もやはり客の作法に関わる例である。また「竹の皮」が茶の湯の炭道具である「羽箒」の手持ちの部分に使われていることによる「竹皮」と「羽箒」の連想なども茶の湯に関する一定以上の知識が求められる付合であろう。

また、『毛吹草』巻四には、諸国の名産物が示され、そこにも茶の湯に関わる項目がいくつかある。

山城 土御門 風炉小板 長者町 囲炉裏縁 大炊御門 炉火箸

二条 釜鑢鎖 奈良鍛冶ト云当時京ニ住ス 茶入袋

坊門 茶筌 粗相物 空也堂ニテ鉢叩作之

油小路 土風炉 西洞院 杉細工茶具 烏丸 麩炙 数寄屋家具 茶柄杓 大津柄杓ト云当時京ニ住ス

誓願寺前 紙表具 宇治 茶 同磨 風炉灰

大和 煎茶 高山茶筌

河内 南庄堺 茶柄杓 風炉立土器 茶酌 数寄屋天井菰 茶磨粗相物也

摂津 住吉 水仙花 分テ当所ニ多シ 桐ノ箱ニ入テ諸方ヘ遣ス

旦過小路 囲炉裏 木綿織緒 箱掛物等ノ紐二用之

美濃 瀬戸焼物 分テ葉茶壺ヲヤク 藤四郎ト云 伊勢天目ト云モ当国より出スト云

丹波 葉茶壺

幡摩 煎茶

備前 伊部焼物 酒瓶塩壺德利鉢等

長門 萩 焼物

筑前 芦屋釜

肥前 唐津今利ノ焼物

とくに「摂津」では「水仙」が取りあげられ、「桐ノ箱ニ入テ諸方へ遣ス」とあるのは、『男色大鑑』七の二「女形も為なる土佐日記」の「水仙の初咲に壺入の客には雪むかしの口を切」の部分や、『好色盛衰記』一の五「夜の間の売家化物大臣」に、

河州倉橋といへる里に、水仙の早咲、毎年後の名月には花はじめて白し。都の高家がたへあげての跡、民家の口切に出しぬ。花一りん金一步にさだまって、是を求め、茶の湯にあはせて、花屋より方々へ、いちにちづ、貸銀取て貸ぬ

とある口切りの茶事における水仙の花の珍重ぶりともあいまって、西鶴作品に描かれている水仙の花の文化的位置づけを裏付けるものとして注目できよう。

また、ここからは風炉小板・炉火箸・土風炉・茶柄杓・風炉灰・風炉立土器のように茶道具としては水屋道具に近いものにまで産地化が進んでいたことが分かる。おそらくそれらにまで産地が生まれるほど茶の湯は隆盛期を迎えていたことの証であろう。

さらに『毛吹草』巻二「世話」を見ると、

いしうすきらんより茶うすきれ

こゝろの師とはなれ　こゝろの師とせざれ

という茶の湯に関わると考えられることわざが見られる。「いしうすきらんより茶うすきれ」が茶の湯と関わっていることは特別な知識がなくともすぐにわかる。ただし「こゝろの師とはなれ　こゝろの師とせざれ」の方は一見するだけでは茶の湯と無関係のように見える。次に「珠光古市播磨法師宛一紙」(「心の文」と称され、茶の湯ではよく知られている一文を示す。

此道、第一わろき事ハ、心のかまんかしやう(我慢我執)也、こふ者(功者)をはそねミ、初心の者をハ見くたす事、一段無勿駄事共也、こふしやにハちかつきて一言もなけき、又、初心の物をはいかにもそたつ(育つ)へき事也、此道の一大事ハ、和漢のさかいをまきらかす事、肝要肝要、ようしん(用心)あるへき事也、又、当時ひゑかる、(冷枯)と申て、初心の人躰がひせん物(備前)、しからき物(信楽)などをもちて、人もゆるさぬたけくらむ事、言語道断也、かる、と云事ハ、よき道具をもち、其あちわひをよくしりて、心の下地によりてたけくらミて、後までひへやせ(冷瘦)てこそ面白くあるへき也、又、さハあれ共、一向かなハぬ人躰ハ、道具にハかからふ(拘)へからす候也、いか様のてとり(手取)風情にても、なけく所、肝要にて候、た、かまんかしやうかわるき事にて候、又ハ、かまんなくてもならぬ道也、銘道二いわく、心の師とハなれ、心を師とせざれ、と古人もいわれし也¹。

この最後には「心の師とハなれ、心を師とせざれ」の一句が引かれているのである。永島福太郎はこの部分について「これは仏教用語であり、歌道では『心を種として心を種とせざること』などと説かれている」と解説している。実際『日本国語大辞典 第二版』では、「こゝろの師となるとも心を師とせざれ」の項目があり、そこでは『北本涅槃經二八』の「願作心師、不師於心」によることわざとされ、『発心集』の「心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ」や、『十訓抄』の「心の師とは成るとも心を師とせざれ」、さらに謡曲大観「熊坂」の「心の師とはなり、心の師とせざれ」の用例が紹介されている⁶。原拠は他の作品例とおそらく同じであろうけれども、

「心の文」の読み下し方は『毛吹草』と同じなのである。この「心の文」は『松屋会記』で知られる奈良の茶家松屋に名物として伝わり、茶人たちに書写された形跡もあることから、いささかでも茶の湯に知識があれば、この一句から「心の文」を連想することは、その語形からしてもけつして不可能ではなかったはずである。

このように俳諧の入門段階でも茶の湯の知識は皆無では付合の理解はできないのである。まして、宗匠として俳諧の座を捌くとすれば、さらなる深い知識が求められていたのではないだろうか。

『類船集』に見られる茶の湯

『類船集』は、延宝四（一六七六）年刊行の貞門俳人梅盛による俳諧辞書でイロハ順に並べた語句それぞれに「付合語とそのヒントになる注記を加え」たもので「貞門・談林の連句を解釈するうえに不可欠の好資料」とされる。西鶴が俳諧創作のためにおそらく目を通していた書物の一冊であることは確実であろう。

『類船集』の特色は付合語の後に他の書物からの引用などの「注記」が付されている点である。ここではその付された解説から茶の湯に関する項目を引用しているものを、茶道全般に関わるもの（茶）・道具に関わるもの（道）・点前に関わるもの（点）の三つに分類し、以下に示す。

I 茶の湯全般・数寄屋に関わるもの

茶① 団子：おうぢうばの中^{（中）}のよきが茶^{（茶）}せんじて昔物かたりこそゆかしけれ

茶② 茶 元日 仏前 朝ぼらけ 初雪 弁当 親の目 彼岸 目さむる

染宮 弱る鯉 やみ目 舟 年寄 食後 やねふき 祖母

桑 うこぎ くこ 奈良 梅の尾 趙州 丹波 宇治

茶は能く散悶（いきどほりをちらす）といふも人事をいひ嫁をそしるわざなるや陸羽といふ人はよき茶

を飲事をするゆへに茶をひきて家には形を作りて祭りしとぞ。東坡煎茶歌に蟹眼已に過ぎて魚眼生ず
颺々と松風の鳴るを作らんと欲すと作れり。陸羽茶経あり。廬全が茶歌あり。姥祖父はよく飲物也。若
輩の者茶をのめばうつけになるといひ伝えたり。

茶③ 罈：磯□屋十郎治親は茶事をしらでとらへたり

茶④ たたく：日高きこと丈五睡正に濃也、軍将門をたたきて周公を驚かすと廬全が茶歌なり

茶⑤ 摘：鮮して摘み芳を焙り村裏を旋すと茶歌にかけり。

茶⑥ 袖引き：こやのしゆくの遊女が袖をじつとひかへて茶つばの狂言也

茶⑦ 数奇 初雪 赤ゑほし 足袋 歌人 盤上 うつし物 紙 鋏 田 食物

茶⑧ 藁屋：茶湯者の植込をし長路地をとをし奥にほのかなるは中々さびたる物也

茶⑨ 接待：七月二十四日六地藏めぐりには道すがら接待あり。炎天の頃は水桶に茶わんをそへて往来の人
にのませ侍るも接待の心なるとかや。：

茶⑩ 路地 笠 げた 雪踏 松葉 石灯籠 雪 植木 栗石 涼風かよふ 隣堺 客 白牛

長路地細路地外路地内路地惣路地ともに珍客をまうくる道とかや。町屋にはあれとも大名家には有
かもしらず。さればこそ隣堺の蔵の脇は皆路地なり。

茶⑪ 蜜柑：十夜の法事のとりおこなふ仏前のもり物にはことさら花やかなり料理過後濃茶のまわりて亭
主もくつろぎたる時鉢につみて出たる又一興なり。

茶⑫ 数寄屋：名宗匠のこのみし数寄屋は中々ゆかしき物也

茶⑬ 繕（つくろふ） 佗数奇の垣壁を所々仕なしたる馳走のこゝろざしやさしく見え候

茶⑭ 焼物：干菓子のたぐひに色々焼物有。

茶⑮ くぐる：路地の中くゝりは物さびたるしつらひ也

Ⅱ 茶道具道に関わるもの

道① 題…行事御賀月見花見の遊興詩歌をもてあそぶる、は皆題によりてつらねたまふ。かけ物茶入其外の

茶の道具にも名和尚たちの外題ありてこそ

道② 箔…茶入の蓋も物の本のへうしも皆薄紙にてはる也

道③ 揉…茶うすは引木にもまる、□。：

道④ 茶筌 結髪 鉢叩 大津 末 畑枝

極楽寺空也堂の所作とし京都に売りありきて田舎の茶筌はいれ□る事也。かこひの窓のあかりにてすゝぎてすかし見るこそ誠に馳走めきたる物なれ。和州の高山茶筌も又名物也

道⑤ 茶碗 畳 放下師 湯漬食 煎茶 仏棚 墓原 公家 干飯 高麗 伊万里 長崎 瀬戸

廬全が茶経に云一碗喉吻調ふ二碗孤悶を破ると有は此事なるべし。名匠のこのまれし唐木の棚にかざりしはうるはしからずや。深閨にある娘のけさう有を入しは見るもすゞしげ也。蒜をむきて茶碗に入たるとはいさぎよき事をいふと也

道⑥ 暖…立花師は枝をあたゝめ茶湯者は茶杓をあたゝむる也

道⑦ 將軍…東山におはせし將軍は茶湯をすき古器をもてあそび給ひしぞかし

東山殿と申せし公方こそ茶湯をすき給ふて古器をあつめ給ひしかや。数奇者は上京におほくして下京にはすくなきとやらん。花すきあり。酒すき有。乱舞をすけるは猿楽をまねき。学問をすけるは蛭雪をあつむ。

道⑧ 組…違棚に茶湯の道具をくみ合てかざる也

道⑨ 人形…茶碗に人形の手有

道⑩ 天目 薬 仏前 墓原 伊勢 高麗 干飯 品玉

生さき□もる窓の内に白粉をほどこしてけさうする客はきれいにたゝへたり。天目山は甲州に有とかや。唐にも同名有と見えたり。ちがひ棚のつけやうにて勝手によりて風流も有。台子風炉釜のかざりやうこそ数奇のならひまちまちなりとぞ。茶碗天目といふ文字の平上去入をしらせ侍りとぞ。

道11 公家：古筆屏風も手鑑などに公家こそおほくて見るしからぬ物なれ

道12 竹の筒：名和尚の茶杓はなをざりにおきがたし

Ⅲ 点前に関わるもの

点① 手をしむる：こしもとつかひこしき履こしきなどに茶をこひて茶碗とりざまこそあやしければくちの上手は此銭いくらあらんさし侍るにちがはずとや：

点② 輪：茶釜は鉄輪をもてあくる

点③ ふくさ わら 着物 茶碗 巾着 有徳人：茶釜の蓋をとるには手もあつかうで自由なり

点④ 畳 屏風 扇 紙 小袖 乗物 石 藪 波 芝居 煤はき 挑灯 古家こぼつ

床 数寄屋 宿がへ 郷 具足

：茶器の置合は畳の目をかぞふるとかや

点⑤ 炉 老人 香 衣地 喉の腫物 病人 雁 茶の湯 料理 舟 台所

：宇治の茶師の家に数多炉をこしらへをく事有。：初雪の朝釜をたぎらせるは数奇のわざならんはやる：雪には茶湯時々におふじてはやる事也

点⑦ 炭：茶湯事をはられて客も亭主の馳走をかんじて立かぬる時今一度炭をくこそ又一興なれ

点⑧ 怪我：茶湯の亭主方は心あはたゝしきこそ尤馳走ぶりなれ

点⑨ 墨跡 禅家 床 開山忌 前栽 心なし 鬼畜 数寄屋 花生 卓 珍客

：茶の湯の中立の間には墨跡をまきて花をするとかや

- 点⑩ 書院…くさり釜のにえ音焼物の音などほのめけば客も馳走をかんし入侍る
- 点⑪ 響…くさり釜のにえ音座敷にひびくこそゆかしけれ
- 点⑫ 客人…雪の夜釜をたぎらせて更行鐘を友とするにおもひの外なるほくりのあし音して戸をた、くこそ興にぜうするわざなり

- 点⑬ 俄…初雪に夜込来て路地の戸た、くは釜に湯のたぎる音を聞かんと也
- 点⑭ 口吸（くちすふ）…濃茶の末になりたるは残すなくてゆかし
- 点⑮ 一折…水仙花のなげ入には葉のおりたる有もよし
- 点⑯ 禿…昔は数奇のかよひに禿をつかひしとかや
- 点⑰ 脇指…数寄屋へ入にはこしの物をさ、ず
- 点⑱ 刀…数寄屋の内へは刀をさ、すして入也
- 点⑲ 山縣…風炉の灰は山がたにとりつくるふもあり
- 点⑳ 蒔…炉の中の灰は炭をせんとて先蒔なり。

このように、茶の湯全般が十五項目、茶道具が十二項目、点前が二十項目に分類することができた。茶①や茶⑨のように煎茶との関わり合いが深いものや、直接には「茶」という語が出てきていない項目もあるが、関連がありそうな項目については広く採録した。

通覧すると、茶②・茶④・道⑤で廬全の茶歌や、点⑩・点⑪でのくさり釜、点⑤・点⑫・点⑬において雪の朝茶について繰り返し述べられていたり、点⑰・点⑱でも茶席への帯刀について、ほぼ同じ表現が繰り返されているなど、その単純な反復から見て、『類船集』は茶の湯に関してさして深い知識や関心に裏付けられて著されていないかのような印象も受ける。

しかし、その一方で点前に関わる解説が二十項目にも及んでいることは看過できない。たとえば、点②・点⑦・

点⑱・点⑳は炭点前に関する項目である。延宝八（一六八〇）年刊の『利休茶湯書』には、炭点前について次のような記述がある。

一 風炉に炭を置き、釜をかけ、亭主勝手へ入被申候者、上座の客何も御覽せられ候へと一礼してふろの有た、ミのそとの畳に畏り、ふろ前へにぢりよるなり。

『南方録』には、

休云、昔隅切までは、炭をつぎたる時、客衆見物すると云ことはなし、これ台子より移りたる折からなれば、台子にて炭見物なきまゝにてありける、古風なりけるに、右切の向炉に成て、客の眼下なるゆへ、釜引あげたる時、炉中を見入て、火相に心を付、さて炭を次たるを見て、その座のべちぢめ、火のうつりを急ぎ、またはうつりを遠くする等の、主の心づかひに感をおこし、挨拶しけることなるを、ひとへに炭を饗膳のもらかたのやうに心得、主もそれを専にをきならべ、客もそのもり方を見物して、炭の出来不出来を挨拶することになり。大なるひがごとなり、しかれども、根本露地の茶の本意、湯あひ、火相、三炭の次第をもわきまへぬ輩は、さこそと覚ゆるなり。

と見られ、炭点前は喉の渴きをしのぐために一服の茶を飲む程度の知識では理解できるものではなく、茶事の作法を知らなければわからないものである。『類船集』の解説も、それをふまえてなされていると考えられる。

また、点⑦には亭主が客との茶事の終わりを惜しんでなされる「立炭」（止炭・名残の炭）への言及がある。点⑲も風炉の「遠山」形の灰形について述べられており、茶事の知識がないと理解できない。もちろん、ここに書かれている断片的な知識からだけでも、茶会の一部であるという程度のこととは理解できようし、別段に深い茶の湯に関する知識がなくても茶の湯の作法であることわかれるといえはわかる。しかし、こうした解説を目の当たりにしたとき、それが茶の湯のどこに位置づけられる作法であるかを知らうとする好奇心を持つのもまた至極当然と言えは当然のことではないだろうか。

点⑭も一見すると生け花の作法のようにも見うけられる。しかし、先の『利休茶湯書』には、

一 すいせんの一色生やう有、葉あつかいにあしらい有事也、可尋也⁽¹²⁾

とあるように、水仙の花の生け方は茶の湯にとって特別な存在だったのである。『毛吹草』の「山城」の項目でも言及したけれども、『日本永代蔵』三の一「煎じやう常とかはる問葉」の、

雪のうちに壺の口を切、水仙の初咲なげ入花のしほらしき事共、いつならひ初られしも見えざりしが、銀さへあれば何事もなる事ぞかし。

や、五の二「四匁七分の玉もいたづらに」の

されども日本第一の大湊なればこそ、勸進能の金一枚の座敷もあけず、銀二百枚の手水鉢も買て、肩つきひとつ、百貫目の質取て、水仙の初咲を待つ心もあり。

の部分などにも水仙についての記述があり、水仙が茶の湯で重視される「口切りの茶会」には欠かせない花であることは、西鶴作品でも十分に認知されていたことがわかる。

また、点⑨の「中立ち」の作法についても、『好色一代男』七の一「其面影は雪むかし」に、

初雪の朝に俄に壺の口きりて……中立あつてのをとずれに、獅子踊りの三味線を弾る、。…

とあり、「初座→中立→後座」といった茶事の形式について俳諧師たちはおそらく常識として知っていたと考えられる。

次に、『類船集』の付合語から茶の湯についての知識をうかがえるものを挙げてみる。

| | | | |
|------------------------|-------------|------------|----------|
| 窟……茶の庵 | 布袋……掛物 | 紙袋……茶 | 南京……染付の鉢 |
| 箴籠 ^{いかま} ……茶摘 | 穂……茶筌 | 柿……茶入の葉 | 長門……萩茶碗 |
| 一文字……茶袋 | 墨跡……床・数寄者・珍 | 柑子……花入の口 | 老人……せんじ茶 |
| 一字……掛物 | 客 | 掛……墨跡・花生 | 無常……茶 |
| 一盃……茶 | 虎……茶師 | 飾……茶具・書院・床 | 白……茶 |

- 慇懃…数寄
 抱…茶壺
 頂…茶碗
 板…風炉・古筆の裏
 うち
 入…煎茶
 池田…炭
 伊賀…土の焼物
 伊勢…天目
 沓岐…茶
 炉…茶
 路地…隣堺・客
 花…床・真壺・数寄
 者…炭
 萩…茶碗
 鉢たたき…茶筌
 坊主…茶入
 肌…茶碗
 箸…炭
 箒…炭取・炉路
 初雪…茶の湯
 供…路地口
 灯…路地
 灯籠…炉路
 灯心…挽茶
 床…すきや・書院・ち
 やつば
 梅尾…茶
 茶筌…結髪・鉢たたき
 ・大津
 茶碗…高麗・伊万里・
 瀬戸
 乳…茶壺
 軸…掛物
 違ひ…目利き
 筑前…芦屋釜・箱崎
 鈴…茶の湯
 白膠木…茶碗・水さし
 乙御前…釜
 蓋…風呂釜
 音羽…土の焼物
 小野…炭竈
 葛城…茶壺
 竹の筒…花
 橘…茶
 薫物…数寄屋
 棚…数寄屋・袋・茶入
 俵…茶・宇治
 畳…床・数寄屋
 手向…茶湯
 溜…茶・茶杓竹
 丹波…葉茶壺
 蓮華…茶壺
 料理…数寄・珍客・夜
 はなし
 礼…茶の湯
 染物…茶碗
 月夜…釜
 塚…茶碗
 壺…茶
 筒…井・花
 爪…茶
 弦…茶入
 氏…茶
 宇治…茶磨・茶
 井…炉地
 鋸…炉の炭
 吞…茶
 葉…壺・茶入
 癖者…茶磨
 菓子…茶の湯
 藪…茶の庵
 競…古筆の目利
 楊枝…茶菓子
 焼物…茶碗
 松葉…炉地・佗数寄
 窓…数寄屋・風炉
 風呂…茶湯
 蓋…茶入
 袋…茶入・茶碗
 ふくさ…茶碗
 福…茶
 ふるふ…茶の湯
 暦…茶碗

- 柱……掛物
 馬場……煎茶
 灰……茶の湯
 判……茶袋
 番……茶
 はく……挽茶
 張……茶壺
 虹……掛物
 錦……茶碗
 俄……客
 にじる……数寄の戸口
 盆……茶の湯
 亭主……茶湯
 出来……茶の湯
 天目……伊勢・高麗
 葵……茶入
 朝……茶わかす
 霰……茶・数寄屋の灰
 泡……茶
 扇置……墨跡見る
 網……茶壺
- 和漢……土焼物
 輪……炭
 割……茶碗
 渡……茶壺
 釜……炭・風呂・茶の湯
 香……茶の湯
 肩……茶入
 土器……風炉
 掛金……花入
 壁……掛物
 掛物……床・書院・数寄屋
 飛鳥川……茶入
 朝原……若茶つむ
 芦屋……釜
 安部……茶
 掃除……炉地
 銘……茶袋
 糞……釜
 精進……古筆の目利
 障子……数寄屋・書院
- 釣……竹自在・花生・灯籠
 摘……茶
 繕……土の焼物・古道具
 詰……茶
 寝起……茶
 茄子……茶
 棗……茶入
 南天……炉地
 長……炉地
 媒……茶湯
 なだれ……茶入の葉
 南蛮……土の焼物
 絵……茶碗
 火焼……釜かく
 一口……濃茶の跡
 彼岸……茶わかす
 紐解……茶入出す
 引……茶・臼
 響……茶碗
 物語……茶飲伽
 文字……茶袋
- 木葉……炉路
 粉……茶
 小鷹……茶
 腰掛……炉路
 円座……肩付ノ茶入・数寄の中立
 縁を結ぶ……茶木の露
 天井……数寄屋・釜のくさり
 手懸……墨跡
 手水……茶の湯・炉路
 手拭……上林
 手前……茶湯
 雪隠……炉路
 せばき……数寄屋
 炭……池田
 数寄……初雪・赤えぼし・足袋・歌人・盤
 上……うつし物・鉄・食物
 煤……古筆・表具

行灯…数寄屋・炬地
あくび…茶磨
暑…濃茶
燭台…数寄屋
象戯…炬路
尻…釜
目録…詰茶
揉…茶
禅法…墨跡
救…茶匙
雪…茶笥

『毛吹草』と比較すると、その項目の圧倒的な多さがわかる。中には「にじる」・「媒」中立・「扇置」・「一口」といった茶の湯の点前を一般的に想像すればすぐにわかるような項目も見られるものの、『類船集』になると茶の湯に關してさらに専門的な知識が求められる付合が多くなっていることがわかる。

たとえば釜に關する項目では、利休の高弟山上宗二が天正十六（一五八八）年頃に著したとされる『山上宗二記』で、

一 紹鷗小叢釜 関白様ニ在、水二升上入、天下一也、此釜信長公ヨリ宗二拝領仕、関白様へ進上

と紹介する、釜の胴回りに粒々が浮き出して鑄込まれている「叢釜」や、同書で続いて「一 乙コセの釜 関白様ニ在、水四升八合入敷」と紹介されている焼口の平釜「乙御前」、さらに「叢釜」よりも粒々が細かく、伝世の数も少ない「雲釜」までもが付合語として紹介されている。『毛吹草』では作数も多い「叢釜」まででとどまっていたものが、『類船集』では「雲釜」まで紹介しているということは、『類船集』ではかなり深い茶道具の知識が前提とされていたためとは考えられないだろうか。「柑子口」なども花入れや杓立てに見られる口造りであり、茶の湯と深く関わる形状の一つである。

茶入に關わる付合語もより多く見られるようになる。「紐解」で「茶入出す」としているのは点前の手続きに關するものであるが、「柿」からは赤茶色の鉄釉である柿釉を連想語とし、「なだれ」は茶入の上釉の流れて景をなすさまであることから「茶入の葉」の連想としていのである。さらには「飛鳥川」という茶入の具体的な銘までも示されている。この「飛鳥川」は瀬戸金華山窯の茶入で、小堀遠州によって見いだされた「中興名物」といわれる茶道具の一つである。遠州が伏見で再見した折に、昔見たときよりも古色を帯びていたところから、『古

今集』の春道列樹の、

昨日といひ今日とくらして飛鳥川ながれてはやき月日なりけり

の歌により銘を付けて秘藏し、後に公金流用の疑いを得たときに救ってくれた謝礼として酒井忠勝に贈られた茶入であるという。⁽¹⁴⁾

『諸艷大鑑』五の二「四匁七分の玉もいたづらに」にも、

やうやう家に久しき飛鳥川の茶入を、妹が轆轤に引きしづめ、定家の三首物の表具はづして、みだれ箱に畳込、すき紙と見せ、……茶入、懸物を江戸のうとくなる人に判金五拾枚にかへて……

と見られるが、この部分もこの付合の連想を背景としているのかも知れない。「円座」から「肩衝ノ茶入」という付合も、「畳付際が一段立ち上がって削り出されている状態⁽¹⁵⁾」を指す「利休円座」といわれる「唐物円座肩衝茶入」からの連想であらう。「蓮華」と「茶壺」の付合なども、『毛吹草』と同様に真壺「蓮華王」との連想であると考えられる。

こうした茶の湯の知識を俳諧の宗匠が持ち合わせることを求められていたとすれば、西鶴も同様にある程度は持ち合わせていたと考えるべきであらう。宗匠として立机しているからには、当然のことながら付合のありようについては熟知していたはずだからである。とくに道具に関する知識は、俳諧の付合を理解するためには日常の家財道具と茶道具を器物として判別できる程度ではなく、「是ならひえて茶入の名を付て見る程」までに「目利き」になっておく必要すらあったのではないかと推測できる。

『西鶴大矢数』と茶の湯

西鶴の俳諧には、これまで見てきた俳諧書にあったような茶の湯の知識はどの程度反映されているのだろう。次に延宝九（一六八一）年の『西鶴大矢数』から、そのことについて検証することとする。連句の性格上、その

一部を取りあげて解釈を試みることは問題が残るところであるが、ここでは茶の湯関連の語の読まれている句と前句との関わりに限って解釈を進めることとする。ただしカ・キについては、後の句も茶の湯との関連が深いと見られたため三句を示した。

『西鶴大矢数』に見られる茶の湯と直接に関わると考えられる句は以下のアからサであった。

ア 卷一 臂は根ふとの色になる草

月影も茶臼のことく廻り行

イ 卷一 むかしかたりに弥右衛門が春

消えにけり茶釜のなのみ雪の泡

ウ 卷四 月花は今目前の二尊院

茶杓は名物炉の名残なり

エ 卷七 お茶一つ兼て進ぜう計也

京衆に爰をすみよしの松

オ 卷八 咲きにけり本朝よりも唐津の花

茶碗焼出し草の下もえ

カ 卷九 尺八吹くもおためづく也

ひとつにはたのしみに成大茶の湯
露は時雨の亭をせて

キ 卷十五 岩か根の床端削て物数寄に

松の茶筌は亭主の手前

初雪ふつた所かおもしろい

ク 卷二六 身にしみる堺の大道

初花も朱坐のごとくに移ろひて

ケ 卷二六 兵は胴骨すへてすへにけり

ちつともこほさぬ天目の水

コ 卷三六 朝顔の盛まつ間の世界也

茶の湯すまして袖の月影

サ 卷三八 極楽の光なりけり金一枚

こゝろざす日の茶を詰にやる

これらは『西鶴大矢数』すべての句数からすれば、わずかな数であるけれども、先に示した俳諧師一般としての茶の湯の知識を前提とした句作を西鶴がしているか否かを、ここから分析することは可能であろう。

まずは茶道具についての深い知識を前提とする付合となつていふと考えられる、イ・ウ・オ・カについて検討する。

イの「弥右衛門」とは、前田金五郎『西鶴大矢数注釈』によれば、

狂言方大藏流宗家当主の代々の通称。……また次句では、釜座名越家当主代々の通称に見立て替えた。⁽¹⁶⁾

と解釈されている。西鶴当時の当主「弥右衛門」は名越昌乗となる。京都名越家の初代で名工として知られるのは、父親の名越三昌（古浄味）であり、子のやはり名工として知られる三典（三典浄味）に続く名越家としての隆盛期にもあたる。ただし、ここで想定している「弥右衛門」は、「むかしがたり」に登場する「茶釜のな」のある人物、すなわち釜師として名声のある人とは、おそらく古浄味と称された三昌を指すことになるであろう。

『俳諧大句数』にも、

弥右衛門一代庭のきれいさ

手のものの釜をしかけて茶の湯すき

あいさつかたき初雪の空⁽¹⁷⁾

とあることなども考え合わせると、西鶴は、先の俳諧書のように釜の形を識別するにとどまらず、釜の作者についての知識も持ち合わせていた可能性をうかがわせる。

ウの「二尊院」については、『西鶴大矢数注釈』では、細川三斎作とも、利休作ともされる茶杓の銘に見られるとする。⁽¹⁸⁾この銘の茶杓は、実際には本阿弥空中の模作が伝わるのみで現在伝来しているものはないけれども、その形状はよく知られ二尊院型の名も生じたほどであるとする。⁽¹⁹⁾「茶杓は名物」とはそれを受けての表現である。

「炉の名残」について、『西鶴大矢数注釈』は「三月末に茶室の炉を塞ぐ前に催す茶会を言う。四月からは風炉を用いる」とする。現在は「名残の茶事」とは口切りから使われてきた茶が少なくなる「名残」を惜しむ茶事のことであり、旧暦の九月ごろから十月の炉開きにかけての頃に催される茶会のことを指す。『西鶴大矢数注釈』では『茶湯三伝集』に「いろいろの初は九月朔日頃より三月晦日頃まで、風炉の初は四月朔日頃より八月晦日頃ま

で」とあるとしている。『槐記』享保十二年八月二十一日の項には、山科道安の「風炉ノ名残ト申ス事ハ何トゾ其アシラヒアル事ニヤト伺フ」に対する近衛家熙の答えとして「……風炉ノ名残ト言ハ、八、九月ナリ、炉ノ名残ト言フハアリ、風炉ノ名残ト言事ハ、先ハナシ⁽²⁰⁾」とする。「炉の名残」とは、炉の終わり頃に炉中が次第に灰で埋まってくるため、釣釜にしたり透木釜にして五徳を外すという習いが現在もあることから、おそらくは炉中の灰が冬を経て次第に上がり、まもなく初風炉を迎えるようすそのものを述べていると考えられる。

オは「唐津の花」から「唐津焼」、そして「茶碗」へと連想したわけであろうが、さらに「草の下もえ」へは『南方録』にある藤原の家隆の

花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや⁽²¹⁾

と相通じている連想とすると、茶の湯と関わる連想としてはむしろ自然となるのではなからうか。

カについては、『西鶴大矢数注釈』では「(前句を、尺八を吹くのも、主君への忠義だてである。と解して)、その演奏も、一つには楽しみになることだ、大茶の湯の場では」との句意を示している。⁽²²⁾もちろん「大茶の湯」とは豊臣秀吉が北野の森で天正十五(一五八七)年十月一日に催した茶会をふまえていると考えられる。とする、この「尺八」とは、天正十八(二五九〇)年の小田原参陣の際に利休が葎山の竹で作ったとされる「園城寺」・「夜長」・「尺八」の竹花入がふまえられているとは考えられないだろうか。藤村庸軒述・久須見疎安編元禄十四(一七〇二)年刊の『茶話指月集』には、

此の筒、葎山竹、小田原帰陣の時の、千の少庵へ土産なり。筒の裏に、園城寺少庵と書付け有り。名判無し。⁽²³⁾又この同じ竹にて、先ず尺八を切り、太閤へ献ず。その次いで、音曲。已上三本、何れも竹筒の名物なり。

とあることから、秀吉に献じられた「尺八」の竹花入と「おためづく也」が響く合うことになる。『好色一代男』七の一「其面影は雪むかし」に「罎に入ば竹の筒情懸られて花の入ぬ事不思議に」とあったり、『諸艶大鑑』四の五「情懸しは春日野の釜」にも「石の割れ目に其時うつて、竹花入掛し折釘残て」ともあることから、西鶴

は竹の花入に関する知識があったと考えられる。さらに次の「時雨の亭」への連想は、和歌の掛物を嫌った利休だったが小倉色紙については茶席の床に掛けることを認めていたことからわかるように、定家と茶の湯との深い関わりによるものであろう。『西鶴諸国はなし』五の一「灯挑に朝顔」でも、定家の小倉色紙の挿話が引かれていたり、『諸艶大鑑』五の二「四匁七分の玉もいたづらに」に「定家の三首物の表具はづして、みだれ箱に疊込、すき紙と見せ」とあることから、この程度の連想は無理のない範囲であったことがうかがえよう。この連想も「灯挑に朝顔」で取りあげられている「朝顔の茶事」をふまえた連想によるものと言えよう。

クは、『西鶴大矢数注釈』では大名物の茶入「初花」を掛けたとする。⁽²⁵⁾「初花」は史実では足利義政、鳥居引拙、京都大文字屋栄甫、織田信長、信忠、徳川家康、豊臣秀吉、宇喜多秀家、徳川家康、松平忠直へと伝来し、後に綱吉に献上されて徳川宗家の所蔵となる。ただ巷説では前田氏が紹介するように北野の大茶の湯には堺の豪商天王寺屋（津田）宗及の所蔵とする説も見られたようである。

ケの「天目の水」は巻十七「まことに都は水の天目 西滴」とも通じる句であり、天目茶碗を指すとする。アは遊女と茶臼の関わりによるものであるし、エは茶事の招待状をもじっている。キは岩が根の松を茶筌に見立て、サは初瀬観音と茶による供養を連想している句である。

『西鶴大矢数』における茶の湯関連の用例はけっして多いとは言えないけれども、西鶴の俳諧に茶の湯の知識がどの程度反映しているかについて検証はできた。その結果、少なくとも茶道具に関しては先に示した俳諧書から得られる程度の知識よりもさらに深い知識を持ち得ていた可能性を探ることができたと考える。

おわりに

西鶴が実際に茶の湯数寄者として茶の湯を愛好した事跡は見あたらない。しかし、茶の湯にはある程度関心を抱いていたであろう可能性を俳諧師西鶴の立場を糸口として考察してきた。とくに茶の湯数寄の俳諧師でなくと

も、俳諧師である以上はある程度の茶の湯の知識がなくては通用しなかったであろうことが付合語を検討することで判明した。西鶴作品を見ると、茶の湯でもとくに茶道具に関する知識が豊富であった形跡を確認することができる。

『日本永代蔵』六の五「智恵をはかる八十八の升搔」に、

亀屋といへる家の茶入、ひとつを銀三百貫目に糸屋へもらふ事有

とある茶入が、「味噌屋肩衝」と言われ、

一二代の十右衛門、よき道具どもをあまた調、所持いたし候、其内亀や何某の味噌屋肩衝の茶入を、判金千枚に調、右の代銀を車に積んで、白昼に引通り、請取渡し致候と申伝ふ。⁽²⁶⁾

と『町人考見録』で紹介される茶入であることはよく知られている。

また、『諸艶大鑑』一の五「花の色替て江戸紫」には、「越中の新」がわび暮らしする所に江戸小田原町の中と吉原三浦屋の小紫が通りかかり、

…近くの庵に立寄、軒の呉竹を所望して「茶杓といふもの切」といふ。あるじ、奥より甫竹がためたる一節に、塩瀬の不洗を取添へ、「もしかやうの物でも御座らぬか、御用に立べし」と出せば、かかる所にあるべき物とおもはねば、いづれも感じて、…

という場面がある。この「甫竹」とは『茶道大事典』によれば、

生没年未詳。安土桃山時代の茶杓師。重右衛門と称し、絹織物を商ったという。利休より茶杓削りの秘伝を受け、特に利休茶杓の下削りをしたと伝えられる。……子孫四代ともに甫竹と称し、天和（一六八一―八四）ごろまで堺に住み、こののち京に移る。⁽²⁷⁾

という人物であり、西鶴がこのような利休茶杓の下削師についてまでも知り得ていたということは、俳諧書で得られる茶の湯の知識以上の深い知識を持ちあわせていたとも考えてよいのではなからうか。このように甫竹や竹花入といった利休道具へ関心を寄せていた形跡があるということは、西鶴は「侘び茶」についての理解も持ち得

ていたとも推測できる。

『西鶴織留』三の一「芸者は人をそしりの種」に、

茶の湯は道具にたよれば、中々貧者の成がたし、「万事あるまかせて侘たるをよし」といひ伝へり、是利休の言葉にもせよ、貧家にてはおもしろからず、ことのたりたる宿にして、物好きをさびたるかまへにいたせる事ぞかし。

とあるのも、そうした「侘び茶」への知識をふまえた部分といえるのではなからうか。西鶴にはたしかに直接的な茶の湯との接点は見いだせないかもしれないが、俳諧師としての修練を通して茶の湯への基本的な知識とそれを元にした茶の湯観は持ち合わせていたことは十分に考えられるのである。

- (1) 中村幸彦校注『近世町人思想』日本思想大系 岩波書店 二一九頁・二〇〇頁・二二四頁
- (2) 加藤楸邨ほか監修『俳文学大辞典 普及版』(榎坂浩尚) 角川学芸出版 二〇〇八年 九七三頁
- (3) 新村出校注『毛吹草』岩波文庫 一九四三年
- (4) 千宗室編『茶道古典全集』三卷 淡交社 一九七七年 三〇四頁
- (5) 千宗室編『茶道古典全集』三卷 淡交社 一九七七年 五頁
- (6) 北原保雄ほか『日本国語大辞典 第二版』小学館 六六九頁
- (7) 林屋辰三郎校注『古代中世芸術論』日本思想大系二二三(村井康彦) 岩波書店 一九七三年 七八五頁
- (8) 加藤楸邨ほか監修『俳文学大辞典 普及版』(榎坂浩尚) 角川学芸出版 二〇〇八年 九七三頁
- (9) 野間光辰鑑修『俳諧類船集』近世文芸叢刊第一卷 般庵野間光辰先生華甲記念会 一九六九年
- (10) 千宗左ほか編『利休大事典』淡交社 一九八九年 六三四頁
- (11) 西山松之助校注『南方録』岩波文庫 一九八六年 二二七頁
- (12) 千宗左ほか編『利休大事典』淡交社 一九八九年 六三四頁
- (13) 熊倉功夫校注『山上宗二記 付茶話指月集』岩波文庫 二〇〇六年 二四二頁
- (14) 林屋辰三郎ほか『角川茶道大事典』(小田栄一) 角川書店 一九九〇年 三八頁

- (15) 小田栄一『茶道具の世界』五 淡交社 二〇〇〇年 四〇頁
- (16) 前田金五郎『西鶴大矢数注釈』一卷 勉誠社 一九八六年 二〇二～二〇三頁
- (17) 谷脇理史ほか『新編西鶴全集』第五卷 上 勉誠社 二〇〇七年 一五四頁
- (18) 前田金五郎『西鶴大矢数注釈』一卷 勉誠社 一九八六年 二七二～二七八頁
- (19) 永島福太郎ほか『茶道辞典』淡交社 一九七九年 五九三頁
- (20) 千宗室編『茶道古典全集』第五卷 一九七七年 一四八頁
- (21) 西山松之助校注『南方録』 岩波文庫 一九八六年 二五頁 に利休がわび茶の心を示した歌として定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮れ」とならんで示されている。
- (22) 前田金五郎『西鶴大矢数注釈』一卷 勉誠社 一九八六年 五四七頁
- (23) 熊倉功夫校注『山上宗二記 付茶話指月集』 岩波文庫 二〇〇六年 一四六頁
- (24) 宗政五十緒『西鶴諸国はなし』の成立』 野間光辰編『西鶴論叢』 中央公論社 一九七五年 三〇六頁
- (25) 前田金五郎『西鶴大矢数注釈』一卷 勉誠社 一九八六年 五〇五頁
- (26) 中村幸彦校注『近世町人思想』 日本思想大系 岩波書店 一八一頁
- (27) 林屋辰三郎ほか『角川茶道大事典』(筒井紘一) 角川書店 一九九〇年 一二三八～一二三九頁